

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：34605

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25560332

研究課題名(和文) 負傷競技者の「心と身体の臨床モデル」に関する実証的研究

研究課題名(英文) A Study on "Clinical Model for Mind and Body" in Injured Athletes

研究代表者

辰巳 智則 (Tatsumi, Tomonori)

畿央大学・教育学部・准教授

研究者番号：30441447

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、負傷競技者がスポーツ傷害を受容するプロセスを明らかにし、このプロセスに影響を及ぼす要因について検討することを目的とした。その結果、重要な他者から実行されたソーシャル・サポートの程度が、負傷競技者が行う心理的苦痛(情動)の調整の仕方に影響することが明らかとなった。また、実行されたソーシャル・サポートの程度により優位に機能する情動調整行動の要因が異なり、このことから、スポーツ傷害を受容するプロセスにも異なるパターンが存在していることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the process related to the psychological acceptance of sport injuries by injured athletes, as well as factors influencing this process. Results indicated that differences in the degree of enacted social support from significant others influenced the regulation of emotions related to psychological distress felt by injured athletes. In addition, emotion regulation behavior for functioning mainly differed according to differences in the degree of enacted social support, and, as a result, it was indicated that there are different patterns in the process related to the psychological acceptance of sport injuries.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：スポーツ傷害受容 心理社会的回復 情動調整 ソーシャル・サポート アスレティック・リハビリテーション 心理支援

1. 研究開始当初の背景

スポーツ傷害（以下傷害とする）には、一回性の外力が身体に強く加わることを機転とする外傷と顕微外傷の反復による障害とが含まれる。いずれの傷害も器質的・機能的な障害による運動能力の低下を被ることから、スポーツ復帰には一定期間の治療とアスレティック・リハビリテーションが不可欠となる。しかし、競技スポーツに専心している競技者が受傷による状況の変化を直ちに受け容れ、能動的なリハビリテーション（以下リハとする）を可能にすることは容易な課題ではない。スポーツ競技者は受傷後、不安や怒り、抑鬱、焦燥感といったネガティブな情緒を生起させ、こうした情緒はリハへの取り組みにも悪影響を及ぼす。このように、スポーツ競技者にとっての傷害は、身体の問題であると同時に心の問題ともなっている（中込・上向, 1994; Santi & Pietrantonio, 2013）。

さてリハ領域では、古くから患者の疾患だけでなく、心理社会的観点をも考慮した包括的支援を行うことの重要性が指摘され（e.g., Engel, 1961, 1977）、アスレティック・リハの分野ではこの種の課題に対し、大きく二つの理論モデルから接近されてきた。その一つは、80年代後半から90年代初頭に登場した精神力動的観点にたつ段階モデル（e.g., Kubler-Ross, 1969）であり、もう一つは90年代半ばに登場した行動理論的観点にたつ認知的評価モデル（Brewer, 1994）である。

アスレティック・リハに関する心理学の国際的な研究動向としては、欧米を中心に認知的評価モデルを起点とする研究が優勢となっており、近年では他に動機づけ理論の観点にたつモデルも登場している。しかし本邦では、中途障害リハにおける「障害受容（Dembo, Leviton, & Wright, 1956; Wright, 1960）」の視点が導入され、段階モデルの観点からも独自の展開をみるようになった（e.g., 上向・竹之内, 1997）。しかしながら、Dembo-Wrightらの「障害受容」の考え方は、①サンプルの代表性に係る理論構築上の問題（日原, 1996）や、②ステージの存在自体への蓋然性の問題（Brewer, 1994; 岡, 1996; Tatsumi & Takenouchi, 2014a）、③人間の価値観の多様性に依じられない点や④負傷したスポーツ競技者に固有の心性を反映していない点（Tatsumi & Takenouchi, 2014a）、他が指摘されてきており、スポーツ傷害を負ったスポーツ競技者に特化した受容モデルの構築が急務となっている。

2. 研究の目的

以上の背景を受け、本研究ではスポーツ傷害受容の心性を評価する観点を負傷競技者の実態から検討し、このスポーツ傷害受容を方向目標とする理論モデル（受容モデル）を仮説検証型の研究を重ね、構築していくことを目的とした。この目的に迫るための具体的な検討課題は次に示す4点であった。

①スポーツ傷害受容尺度を作成し、スポーツ傷害受容を心理査定する観点を抽出すること、

②スポーツ復帰後の心理適応とリハ期における心理行動的要因（特にスポーツ傷害受容）との関連を検討すること、

③スポーツ傷害受容の先行因（心理社会的回復要因）を同定すること、

④自己の情動調整行動（以下ERBとする）と重要な他者から実行されたソーシャル・サポート（以下実行SSとする）がスポーツ傷害受容プロセスに及ぼす影響過程を検討すること。

上記の検討課題に対し、以下の研究方法を採用した。

3. 研究の方法

本研究ではスポーツ傷害を、「一週間以上のスポーツ停止及びリハを要する程度のもの」と定義した。なお、調査対象となる負傷競技者（もしくは負傷経験がある競技者）は、体育・スポーツ系の大学・学部属する者やスポーツ推薦で入学した者等、比較的競技力が高い現役の学生競技者とした。

まず課題①では、現在負傷している競技者を対象とし、スポーツ傷害受容尺度を開発するための調査研究を行った。具体的には、本検討に先立ち実施された半構造化面接（過去に負傷経験があるスポーツ競技者を対象）から評価項目を作成し、質問紙調査にて収集されたデータに基づきスポーツ傷害受容を構成する因子の抽出及び尺度の信頼性と妥当性の検討を行った。

課題②では、過去に負傷経験がある現役のスポーツ競技者を対象とし、スポーツ復帰後の適応状態と遡るリハ期における心理行動的要因との関連を明らかにするための調査研究を行った。ここでは、スポーツ復帰後の心理的適応を時間的展望FB-FF論（勝俣, 1995）の観点から推定し、各適応状態とスポーツ傷害受容及びリハ専心性他との関連について検討した。

課題③では、課題②で収集されたデータにデータを加重し、スポーツ傷害受容の先行因（心理社会的回復要因）を明らかにすることを主目的とした調査研究を行った。具体的には、先行研究（辰巳・中込, 1999）に基づきスポーツ傷害受容を促進させる心理社会的回復要因を同定し、当該要因を外生変数とし、スポーツ傷害受容及びリハ専心性を内生変数とした影響過程（心理社会的回復要因→スポーツ傷害受容→リハ専心性）を検討した。

課題④では、過去に負傷経験がある現役のスポーツ競技者を対象とし、自己のERBがスポーツ傷害受容プロセス（心理社会的回復要因→スポーツ傷害受容）に及ぼす影響過程について、実行SSの程度の差異から検討するための調査研究を遂行した。ここでは、実行SSの程度から高一低SS群に負傷競技者を分割し、ERBがスポーツ傷害受容プロセスに及

ぼす影響過程（ERB→心理社会的回復要因→スポーツ傷害受容）を検討した。

4. 研究成果

1) スポーツ傷害受容尺度（AIPAS）の作成

AIPAS の開発を通し、スポーツ傷害受容の心性は「自己努力における意図性」及び「現状随順性」の二つの因子から評価できることが明らかとなった。前者は、負傷競技者が生活の再建に向けて行っている自己の対処努力の内容に一貫した意図が備えられている心性を指す。後者は、負傷競技者がスポーツ傷害という事態全体に対して心理的折り合いがつけられている心性を指す。なお、AIPAS の信頼性は十分に保たれ、妥当性を備えた尺度であることも併せて確認された。

2) スポーツ復帰後の心理適応とリハ期におけるスポーツ傷害受容との関連

スポーツ復帰後の競技生活への心の適応状態として最も望ましいと考えられる時間的展望の「ポジティブ様態（負傷した過去、復帰後の現在及び未来への繋がりが肯定的に認知されている様態）」、未だ葛藤状態にある「ニュートラル様態」、最も不適応的な状態にある「ネガティブ様態（負傷した過去、復帰後の現在及び未来への繋がりが否定的に認知されている様態）」の3つの適応様態が抽出された。加えて、ポジティブ様態に属する者はネガティブ様態やニュートラル様態に属する者よりも、リハ期にスポーツ傷害を受容し、リハに専心していたことが明らかとなった。この結果は、リハ期におけるスポーツ傷害受容の水準とスポーツ復帰後の競技生活における心理適応状態との間に正の関連があることを示唆するものであり、スポーツ傷害受容を方向目標とする心理介入の妥当性を追認するものであった。

3) スポーツ傷害受容の先行因の同定

影響力をもつ心理社会的回復要因から順に、「情緒的安定性」、「時間的展望」及び「チームメイトとの意思疎通性」がスポーツ傷害受容の先行因であることが明らかとなり、双方からなるプロセスを「スポーツ傷害受容プロセス」と命名した（図1参照）。またこの結果からは、特に情緒的安定性の回復を調節する個人要因や状況要因を考慮することの有効性が示唆された。

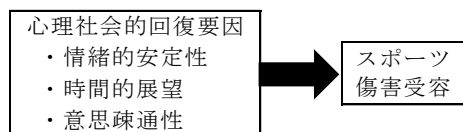


図1 スポーツ傷害受容プロセス

4) 重要な他者から実行されたSSの程度が負傷競技者のERB及びスポーツ傷害受容プロセスに及ぼす影響

上記3)の研究成果を受け、スポーツ傷害受容プロセスを調節する個人要因として、負

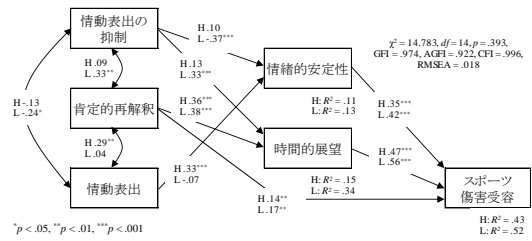


図2 ERBがスポーツ傷害受容プロセスに及ぼす影響

注) H = 高SS群, L = 低SS群. パスに付した数値は標準化係数である。なお、誤差変数の図示は省略した。

傷競技者が行使していたERBを、状況要因として、重要な他者から実行されたSSを取り上げた。結論として（図2参照）、①実行SSの程度が十分な負傷競技者（H=高SS群）においては、情動表出（心理的苦痛の表出）に関する機能が優位に働き、情緒的安定性の回復を介して、スポーツ傷害受容を促進させることが示唆された。また、②実行SSの程度が乏しい負傷競技者（L=低SS群）においては、情動表出の抑制に関する機能が優位に働き、情緒的安定性の回復を阻み、スポーツ傷害受容を阻害させてしまうこと、その一方で、③実行SSの程度が乏しいと、情動表出を抑制する機能が優位に働き、時間的展望の回復を介して、スポーツ傷害受容を促進させることが示唆された。次に、④負傷状況の捉え直しを図る肯定的再解釈に関するERBは、実行SSの程度に関係なく機能し、時間的展望の回復を介して、スポーツ傷害受容を促進させる効果及び、二つの心理社会的回復要因の回復を介さずにスポーツ傷害受容を直接促進効果があることが示唆された。最後に、⑤実行SSの程度が十分な場合には情動表出に関するERBが、実行SSが乏しい場合には情動表出の抑制に関するERBが、肯定的再解釈に関するERBの行使とそれぞれポジティブに関連し合う、といった点が示唆された。

なお、情動表出の抑制の行使の程度に実行SSの程度は関連していなかった。他方、情動表出や肯定的再解釈に関するERBに関しては、実行SSの程度が乏しい者ほど行使の程度が少なかったが、情緒的安定性の回復度は高い傾向にあった。この結果からは、実行SSが乏しい者は、情緒的安定性の回復を意図したERBを行使する必然性を低く見積もっていたことが考えられ、よって、時間的展望の自力的回復に比重を置いた情動表出の抑制と肯定的再解釈の機能を同期させて、スポーツ傷害受容を促進させていたと解釈される。ただし、情動表出の抑制はSSを受領するための手がかりを周囲に与えにくい。よって、第三者からSSが実行される可能性は低い。特に長期に及ぶリハでは、運動パフォーマンスの停滞や後退、傷害の予後やスポーツ復帰に係る不安の喚起といった情緒面への弊害が生じることも考えられる。情動表出の抑制は、否定的な情緒の逃げ場を封じさせ、この逃げ場を失った情緒が情緒的安定性の回復を阻み、スポーツ傷害受容を阻害させるという負

の側面については留意すべきである。

以上に示した結論からは概して、実行 SS による情動表出がスポーツ傷害受容プロセスに正の効果を一樣にもたらすと言える。他方、実行 SS が乏しい負傷競技者には、情動表出に関する ERB を奨励することによる積極的な恩恵は期待できないかもしれないが、「情動表出を抑制しない行動」が情緒的安定性の回復、そしてスポーツ傷害受容の促進に寄与するという結果の側面についても留意すべきである。

今後の研究課題としては、負傷競技者が行使している ERB のもつ意味についてより深く迫る必要がある。すなわち、どのような場面で、誰からの、どのような種類の SS が、負傷競技者による ERB の選択に影響しているのか、という視点に加え、負傷競技者がどのような場面で、どのような種類の ERB を、何をねらいとして行使しているのかを明らかにする必要がある。そのためには、重要な他者から実行されている SS と負傷競技者自らが行使している ERB との相互作用について、競技スポーツの世界に内在する文化的・社会的側面をも加味しつつ、質的に検討を重ねていく必要がある。

<引用文献>

- ① 中込四郎・上向貫志. (1994). スポーツ障害を起こした選手へのカウンセリング. *Japanese Journal of Sport Science*, 13, 3-8.
- ② Santi, G., & Pietrantonio, L. (2013). Psychology of sport injury rehabilitation: a review of model and interventions. *Journal of Human Sport & Exercise*, 8(4), 1029-1044.
- ③ Engel, G. L. (1961). Is grief a disease?: a challenge for medical research. *Psychosomatic Medicine*, 23, 18-22.
- ④ Engel, G. L. (1977). The need for a new medical model: a challenge for biomedicine. *Science*, 196 (4286), 129-136.
- ⑤ Kubler-Ross. (1969). *On death and dying*. New York: Macmillan.
- ⑥ Brewer, B. W. (1994). Review and critique of models of psychological adjustment to athletic injury. *Journal of Applied Sport Psychology*, 6, 87-100.
- ⑦ Dembo, T., Leviton, G. L., & Wright, B. A. (1956). Adjustment to misfortune: a problem of social-psychological rehabilitation. *Artificial Limbs*, 3, 4-62.
- ⑧ Wright, B. A. (1960). *Physical disability: a psychological approach* (pp. 106-137). New York: Harper & Row Publisher.

- ⑨ 上向貫志・竹之内隆志. (1997). スポーツ障害の受容に関する事例研究. *総合保健体育科学*, 20 (1), 99-106.
- ⑩ 日原信彦. (1996). *障害の受容と適応*. 保坂隆 (編). *現代のエスプリ: リハビリテーション心理学* (pp. 73-84). 東京: 至文堂.
- ⑪ 岡浩一郎. (1996). *受傷選手のリハビリテーションにおける心理的介入の可能性*. 日本スポーツ心理学会第 23 回ワークショップ A 口頭発表資料.
- ⑫ Tatsumi, T., & Takenouchi, T. (2014a). Causal relationships between the psychological acceptance process of athletic injury and athletic rehabilitation behavior. *Journal of Physical Therapy Science*, 26, 1247-1257.
- ⑬ 勝俣映史. (1995). 時間的展望の概念と構造. *熊本大学教育学部紀要 人文科学*, 44, 307-318.
- ⑭ 辰巳智則・中込史郎. (1999). スポーツ選手における怪我の心理的受容に関する研究—アスレチック・リハビリテーション行動の観点からみた分析. *スポーツ心理学研究*, 26(1), 47-53.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ① Tatsumi, T., Fukumoto, T., & Bai, D. (2015). Psychological adjustment to athletic injuries. *Bulletin of Kio University*, 12(3:Special Issue), 19-26. (査読有)
- ② Tatsumi, T. (2014). Relationship between adaptation after returning to competition and psycho-behavioral attitudes during injury rehabilitation. *Journal of Physical Therapy Science*, 26, 1813-1823. (査読有)
DOI: 10.1589/jpts.26.1813
- ③ Tatsumi, T., & Takenouchi, T. (2014a). Causal relationships between the psychological acceptance process of athletic injury and athletic rehabilitation behavior. *Journal of Physical Therapy Science*, 26, 1247-1257. (査読有)
DOI: 10.1589/jpts.26.1247
- ④ Tatsumi, T., & Takenouchi, T. (2014b). Psycho-social factors promoting psychological acceptance of athletic injuries. *AFSM Proceedings*, 87-90. (査読有)
- ⑤ Tatsumi, T., & Fukumoto, T. (2014). Difficulties describing feelings,

stress coping, and accepting injuries by elite college athletes [Abstract]. *International Journal of Behavioral Medicine*, 21(1), 39. (査読有)

- ⑥ Tatsumi, T. (2014). Process of psychologically accepting athletic injury and athletic rehabilitation behavior [Abstract]. *Journal of Clinical Sport Medicine*, 24(3), 30. (査読有)
- ⑦ Tatsumi, T. (2013). Development of athletic injury psychological acceptance scale. *Journal of Physical Therapy Science*, 25, 545-552. (査読有)
- DOI: 10.1589/jpts.26.545

[学会発表] (計 10 件)

- ① 辰巳智則・福本貴彦・唄大輔. (2015, 9 月). 負傷競技者の心理的要因が運動行動及び動作回復に与える影響. 畿央大学開学 10 周年プロジェクト研究助成成果報告会口頭・ポスター発表セッション.
- ② Tatsumi, T. (2015, July). *Emotion regulation and the process of psychologically accepting athletic injuries*. Poster session presented at 14th European Congress of Sport Psychology, Bern, Switzerland. (査読有)
- ③ Tatsumi, T., & Bai, D. (2015, July). *Development of the athletic injury social support scale*. Poster session presented at 14th European Congress of Sport Psychology, Bern, Switzerland. (査読有)
- ④ Tatsumi, T. (2015, July). *Relationship between the psychological attitudes during injury rehabilitation and adaptation after returning to competition*. Poster session presented at 14th European Congress of Psychology, Milan, Italy. (査読有)
- ⑤ Tatsumi, T., & Fukumoto, T. (2014, August). *Difficulties describing feelings, stress coping, and accepting injuries by elite college athletes*. Poster session presented at 13th International Congress of Behavioral Medicine, Groningen, Netherlands. (査読有)
- ⑥ Tatsumi, T. (2014, August). *Pilot study on social support for injured athletes*. Poster session presented at 6th Asian South Pacific Association of Sport Psychology International Congress, Tokyo, Japan. (査読有)
- ⑦ Tatsumi, T. (2014, June). *Process of psychologically accepting athletic*

injury and athletic rehabilitation behavior. Poster session presented at XXXIII FIMS World Congress of Sports Medicine, Quebec, Canada. (査読有)

- ⑧ Tatsumi, T., & Takenouchi, T. (2013, September). *Examination of the psycho-social factors which promote psychological acceptance of athletic injuries*. Poster session presented at 13th Asian Federation of Sports Medicine Congress, Kuala Lumpur, Malaysia. (査読有)
- ⑨ Tatsumi, T. (2013, August). *Difficulty describing feelings and psychological stress coping behavior of injured athletes*. Poster session presented at 5th Asian Congress of Health Psychology, Daejeon, Korea. (査読有)
- ⑩ Tatsumi, T. (2013, July). *Psychological acceptance to athletic injury: rehabilitation commitment and temporal perspective*. Poster session presented at 13th European Congress of Psychology, Stockholm, Sweden. (査読有)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辰巳 智則 (TATSUMI, Tomonori)
畿央大学・教育学部・准教授
研究者番号：30441447

(2) 研究協力者

竹之内 隆志 (TAKENOUCHI, Takashi)
森岡 周 (MORIOKA, Shu)
福本 貴彦 (FUKUMOTO, Takahiko)
唄 大輔 (BAI, Daisuke)
鈴木 敦 (SUZUKI, Atsushi)